

## 新たな農山村宿泊スタイルの提案による地域活性化

財団法人中部産業・地域活性化センター  
地域整備部 荒川由章

### はじめに

農山村地域の持つ豊かな農環境を保全していくためには、小規模農家がその地域で農業を維持・継続していくことが重要であり、そして、豊かな農環境から生み出される農村風景・景観の「美しさ」を地域の活性化に結びつけていくことが、これからの農山村地域にとって欠かせない要素である。

本論は、こうした認識の下で、グリーン・ツーリズムの一環として行われてきた「農家民宿」に着目し、これまでとは違った観点から、新たなスタイルでの農家民宿についての検討を行ったものである。

## 1 農家民宿

### 1-1 農家民宿とは何か

農家民宿は一般的に、「農山村地域において農業者が経営する宿泊施設であり、宿泊客に様々な農山村体験を楽しんでもらう施設」という理解がされている。

1992年、農林水産省が西欧を見倣い、農山漁村に対する新たな政策として「グリーン・ツーリズム」（＝緑豊かな農山漁村で地域の自然・文化・人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動）という考え方を打ち出した。このグリーン・ツーリズムを具体化すべく制定された「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律（1994年6月29日制定）」において、「農林漁業体験民宿業」という業態が位置づけられたため、通常、これを農家民宿という概念で捉えている。

「農林漁業体験民宿業」とあるように、あくまでも「民宿」のひとつの形態という位置づけであるため、農家民宿は元来、旅館業法や食品衛生法の厳格な制約の下に営業が許可されてきた。しかし、昨今では、農山村漁村地域の活性化を目的に、旅館業法上の面積要件の緩和や、送迎サービスを道路運送法上の許可対象外とする等の全国レベルのものから、食品衛生法上での家族兼用の調理場の容認といった都道府県レベルのものまで、農家民宿に関する様々な規制緩和措置がとられるようになり、この分野への新規参入がしやすいようになってきている。



(農林水産省HPより作成)

[http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose\\_tairyu/k\\_gt/pdf/kisei\\_kanwa.pdf](http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/k_gt/pdf/kisei_kanwa.pdf)

なお、農家民宿を「宿泊する施設としての農家」、農家民泊を「農家に宿泊するという行為」というように、限定的な言い方をして両者を区別する考え方もあるが、これらの使いわけにはあまり意味がないと考えるため、本論では便宜上、「農家民宿」という言い方に統一して使用することとする。

## 1-2 わが国の宿泊施設の分類と農家民宿

### (1) 旅館業法による分類

旅館業法では宿泊施設を以下の4つに分類している。農家民宿は民宿の一形態とされるため、概ね、旅館又は簡易宿所に分類される。

分類	適用
ホテル営業	洋式の構造及び設備を主とする施設を設け、宿泊料を受けて人を宿泊させる営業で、簡易宿所営業及び下宿営業以外のもの (客室10室以上、洋室客室 9㎡以上)
旅館営業	和式の構造及び設備を主とする施設を設け、宿泊料を受けて人を宿泊させる営業で、簡易宿所営業及び下宿営業以外のもの (客室 5室以上、和式客室 7㎡以上)
簡易宿所営業	宿泊する場所を多人数で共用する構造及び設備を主とする施設を設け、宿泊料を受けて人を宿泊させる営業で、下宿営業以外のもの
下宿営業	施設を設け、1月以上の期間を単位とする宿泊料を受けて、人を宿泊させる営業

<旅館業法より抜粋>

## (2) 宿泊施設数の推移

旅館業全体としての施設数は一貫して減少傾向にある。しかし、業態別では、最多を占める「旅館」が大きく減少し続けている反面で、「ホテル」は増加傾向にある。「簡易宿所」については微増という状況である。

年 度	2004	2005	2006	2007	2008	2009	年平均増減率
旅 館 業	90,343	87,927	86,753	85,503	84,411	82,952	▲1.7%
ホテル営業	8,811	8,990	9,165	9,427	9,603	9,688	1.9%
旅館営業	58,003	55,567	54,070	52,259	50,846	48,966	▲3.3%
簡易宿泊営業	22,475	22,396	22,577	22,888	23,050	23,429	0.8%
下宿営業	1,054	974	941	929	912	869	▲3.8%

<厚生労働省「生活衛生関係営業施設数調べ」より作成>

## (3) 農家民宿の現状

世界農林業センサス（2010）、農林業センサス（2005）によれば、中部9県と全国における農家民宿の経営体数は次表のようになっており、全国的には34%増と、旅館や簡易宿所の増減に比べると大幅な伸びを見せている。

	表1-2-(3) 農家民宿（経営体数）		
	2010	2005	増 減
富 山 県	11	10	1
石 川 県	35	21	14
福 井 県	36	34	2
長 野 県	330	349	-19
岐 阜 県	35	16	19
静 岡 県	16	35	-19
愛 知 県	9	2	7
三 重 県	7	4	3
滋 賀 県	16	22	-6
全 国	2,006	1,492	514

中部9県内での農家民宿は長野県が最多となっている。長野県では、2007年に「農家民宿開業の手引き」を作成し、関係法令や基本的ノウハウも周知しているが、他県に先んじて農家民宿に取り組んでいるというより、農家民宿という用語が登場する以前から、一般民宿などにおいて、地域の特色ある魅力づくりとして、地勢的な利点を活用したそば打ち体験や収穫体験といった取り組みが行われてきた経緯がある。このため、従来から、農林業センサスの調査書に農家民宿という回答を寄せてきた経営体（兼業農家）が多数あるとの指摘もある。

ただし、2010年が2005年に比して長野県、岐阜県で19軒も減少している理由についてはよくわかっていない。本来であれば2005年には食品衛生法上の規制緩和と通達が出されたことなどもあり、一定数は増加していてもおかしくないはずであり、全国的に514軒の増加が見られる中での減少には、統計には表れない何らかの原因があるのかもしれない。

### 1-3 わが国におけるこれまでの農家民宿

#### (1) グリーン・ツーリズムの概念

そもそもグリーン・ツーリズムは、西欧が発祥の地であり、都市部の住民が農山漁村地域で自然・文化・人々との交流を楽しむことが目的で始まったものである。西欧の場合、長期間にわたる休暇があり、それを利用して一定期間、農村に滞在すること、そして農村地域の人々との交流を行うことが一般的に行われてきた。一方、日本では、農林水産省が提唱したグリーン・ツーリズムの概念も都市部と農村部との交流を中心に据えたものであったが、西欧と違って、①長期間の休暇がとりにくいこと、②都市部と農村部の距離が比較的近いことなどから、比較的短期間の滞在が多く、西欧のような姿にはなっていないのが実情である。また、ツーリズムという名称から単なる観光というイメージを持つ人も多い。そのため、我が国ではグリーン・ツーリズムの概念は、本来の「交流」という概念から、「観光」「娯楽」「イベント」などを含めた広範なものになってきている。

#### (2) 一般的な農家民宿の姿

「農林漁業体験民宿業」という名称のとおり、農家民宿は、都会では感じる事が難しい豊かな自然に囲まれた環境で、都会の人が農作業などの様々な体験を行うことができる「民宿」であり、地域の人々の交流を行うことができる「交流施設」という側面を持った宿泊施設でもあるとされている。通常、1泊2食付で1万円以内での宿泊が可能なレベルの施設であるが、各体験コースは別料金となっていることも多く、規模的には民宿に類した中規模のものもあれば、数部屋しかない小規模なものもある。小規模な農家民宿では、歴史ある古民家を改築して宿としての特徴づけをしているところもある。

なお、一般的には農家民宿の魅力は次の4点であるとされている。

- ① 農作業体験や農産物の調理・加工体験を楽しむことができる。
- ② その地域で獲れた新鮮な食材や特色ある郷土料理を味わうことができる。
- ③ 豊かな自然や残された日本の原風景を楽しむことができる。
- ④ 民宿の経営者や家族、地域の人々との気さくな交流を楽しむことができる。

#### (3) 修学旅行型農家民宿の拡大

昨今では全国のあちこちで、グリーン・ツーリズムの発展形として、中高生をターゲットにした農家民宿が活発化している。こうした動きは、自治体等が地元への誘客を図るかたちで行われており、基本的には従来の修学旅行の延長線上にある。行き先をディズニーランドのようなレジャー施設でなく、農山村地域に変更し、現代の学生が日常生活ではあまり体験したことのない、農作業などを体験させるという教育的観点からの取り組みとして行われている。

この取り組み自体には一定の評価がされているが、受け入れ側である農家にとってみれば、若年層との交流という目に見えないプラス効果はあるものの、一定数の学生をまとめて面倒を見なければならぬという点で、従来の農家民宿よりも負荷がかかるため、どのような農家でも気軽に参加できるというのではなく、特に小規模な農家では参加に二の足を踏むケースも多いようである。

また、学生の受け入れ時期がいわゆる農繁期と重複するケースが多く、ある程度の人的余裕がある地域や、役場を中心とした総合的な受け入れ体制ができていない農村地域でなければ継続的な取り組みが実現しにくいという側面もある。

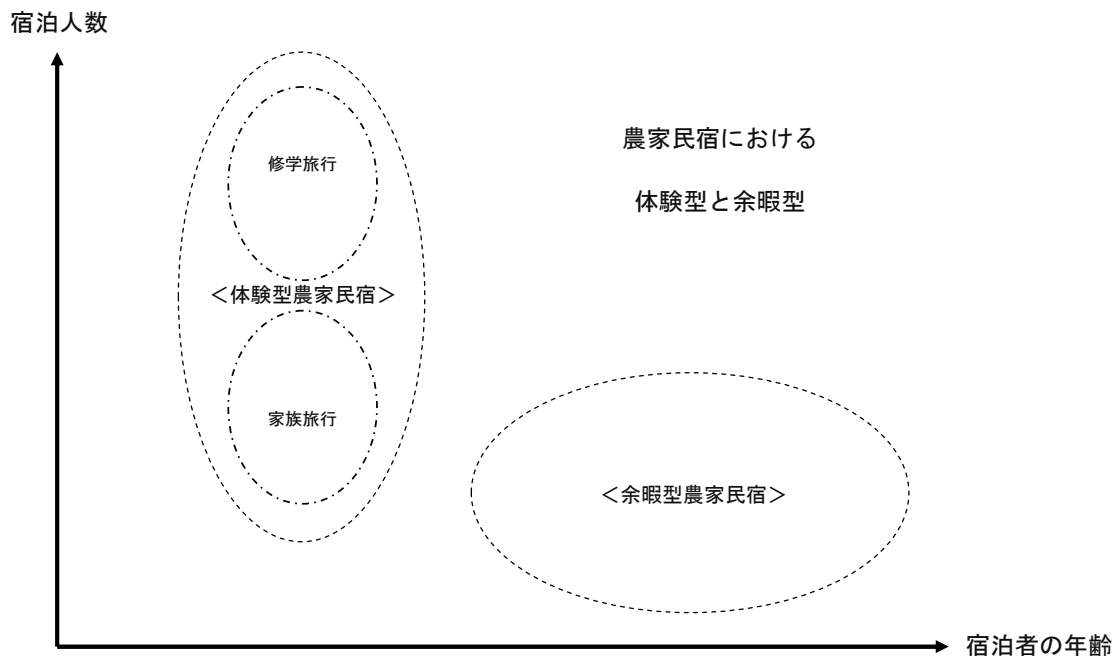
#### （４）体験型の農家民宿と余暇型の農家民宿

一般的な農家民宿は、農作業などを楽しむことを目的に体験コースがいくつか用意されているが、中には全く体験コース設けないところや、選択制として体験コースは用意されていても、ほとんど利用していないところもある。こうした農家民宿では、宿泊客に農村地域の美しい環境・風景を楽しんでもらい、自由な時間を過ごしてもらうことを主眼に置いている。滞在期間こそ短い、西欧のグリーン・ツーリズムに近いかたちであり、宿泊客は農山村地域でのゆったりした休日過ごす。これらの施設は、体験型に比して余暇型の農家民宿という言い方ができるであろう。

こうした目的の宿泊客は、受け入れ側にとって手間がかからないものの、反面、あまりお金を落とさない客であるとも言える。しかし、都市住民の「癒し」指向が強くなっている昨今では、決して無視できない層でもある。

次のイメージ図は、体験型、余暇型の農家民宿と、宿泊客の人数、年齢層との関係を表したものである。

<図1-3-(4) イメージ図>



体験型では農家側の手間もかかるが、宿泊人数も一定数が期待でき、収益も一定のものとなる。一方、余暇型では農家側の手間がかからないが、宿泊人数も少数となり、結果として、収益は限定的なものとなってしまふ。

なお、世界農林業センサスでは、農家民宿の数を都道府県別で調査しているが、農家民宿の定義については、その事業内容を説明しているにすぎず、宿泊の対象者や、農家民宿の目的、位置づけにまで踏み込んだ調査、記載とはなっていない。

#### 【農家民宿】（世界農林業センサスの用語解説より抜粋）

農業を営む者が、旅館業法（昭和23年法律第138号）に基づき都道府県知事の許可を得て観光客等の第三者を宿泊させ、自ら生産した農産物や地域の食材をその使用割合の多寡にかかわらず用いた料理を提供し料金を得ている事業をいいます。

## 1-4 欧米における農家民泊～B & B

欧米における農家民宿は、西欧、特にアルプス地域を中心に広がってきた。1960年代の後半に第一次のブームが沸き起こり、次に1990年代には「農家で休暇を」という西欧諸国の政策ともあいまって、それまで観光化が進んでいなかった地域にも農家民宿の開業が進められた。これら欧米における農家民宿と日本の農家民宿の大きな違いは、その宿泊形式にある。

欧米の農山村地域にはホテルやペンションのような一定規模の人が宿泊できる施設ではなく、小規模（家族経営が多い）で比較的低価格に宿泊のできるB & B（Bed & Breakfast）という宿泊形式が多く存在している。B & Bは、文字通り、宿泊と朝食をセットにした料金となっており、通常、夕食は提供していない。また、普通の住宅・民家をリフォームして営業しているところが多く、観光地やリゾート地ばかりでなく、市街地に立地するところもある。欧米の農家民宿の多くはこの宿泊形式を採用している。

欧米のグリーン・ツーリズムでの農家民宿は、農山村地域に立地した宿泊拠点であり、豊かな自然環境の下で農村の人々と交流しながら長期の休暇を過ごす場所であるが、日本の農家民宿は、宿泊拠点とは言えず、農作業等の体験などをし、忙しく短期間の滞在で終わってしまう。長期の滞在であるために、費用が少なく済むB & Bは、欧米の宿泊客にとってニーズにマッチした形式であると言えよう。

B & Bでは夕食を供しないため、宿泊客は例えば村落の中心にあるレストランやパブ等で食事をする。また、日本のように宿泊中の農作業体験などのメニューがないため、受け入れ側である農家は、午前中に朝食、清掃、洗濯、買い物などの用事（これらは大概、女性が行い、男性は朝食後、農作業に出る）を済ませて以降は、経営者の家族は農作業に集中できる環境にある。



写真1-4 ドイツの農家民宿

（「ドイツの農村政策と農家民宿」富川久美子著より転載）

なお、日本の農家民宿では古くからある建物の良さを強調するためか、古民家調の造りが多いが、欧米の農家民宿には特にそのようなこだわりはなく、古くからの家を大切に使用しているところもあれば、近代的にリフォームしたところもあり、多種多様な様相を示している。あくまでも主役は農家の住人たちであり、客向けの宿泊施設は付随的なものにすぎないという考え方が浸透しており、農家の人々があくまで副次的に旅行者を宿泊させているという考え方が根本にあるため、旅行者も必要以上のサービスを望むことはない。

B & Bによる欧米型の農家民宿と日本型の農家民宿では、農山村地域での宿泊施設という点では同じようなものでありながら、受け入れ側の負担が大きく異なっていることに注目したい。

では、日本ではB & Bの農家民宿は存在しないのであろうか。グリーン・ツーリズムの導入に前後して日本でもB & Bを採用した宿泊施設がいくつか現れ始めている。しかし、1泊2食付という宿泊形式が日本の文化、風習ともなっているためか、なかなか浸透するまでにはいかない様子であり、最近ではB & Bを基本としながらも、夕食について予約制（別料金）で受けている農家民宿も見られる。

## 1-5 本論の目指す新しい農家民宿の方向性

わが国の農家民宿は、民宿の一形態であるという認識が一般的であるため、宿泊する側も受け入れ側も、従来の民宿・旅館の延長線上で農家民宿というものを考えている。1泊2食付の形態が多いのも、両者がそ

れを当たり前のこととして受け入れているからであろう。本論では、こうした従来型の農家民宿を否定するものではないが、これまであまり浸透してこなかった欧米のB & Bによる農家民宿を提案することとしたい。夕食の提供という負担を少なくすることで、小規模農家にも取り組みやすいものとするのが出来る。

もちろん、単純に夕食を提供しないというだけでは集客が難しくなるため、そこに何らかの工夫が必要となる。また、グリーン・ツーリズムの一環として当たり前に思われてきた体験コースについての見直しも必要であろう。体験コースの提供が前提でなければ、農家の手間はさらなる削減が可能となる。

次章では、農山村地域への旅行者として考えられる、都市部在住の住民を対象に行ったアンケート調査を紹介し、農家の手間がかからない、新しいかたちでの農家民宿の可能性や、その展開に際して留意すべき点、工夫すべき点といった検証を進めてみたい。

## 2 宿泊客の意識～ネット調査によるニーズ把握

宿泊客のニーズを確認するために、当財団では、農家民宿に宿泊することが期待されるターゲットを都市部住民として、東京23区内、名古屋市内、大阪市内に在住する計3,090人（各地域で1,000人見当という調査設定）を対象として、「農山村地域への旅行について」のアンケート調査を実施した。（2011年2月調査）

### ■都市部住民の農山村地域への関心度

農山村地域への旅行に「興味がある」と回答したのは、全体の46%であったが、特に20代の回答者においては50%を超える人が興味を持っていることがわかった。この傾向には特に男女の差は見られなかった。中高年層ではなく、20代が農村地域への旅行に最も興味を持っているという点は、受け入れ側である農山村地域も注目すべきことであろう。

#### 【あなたは農山村地域への旅行に興味がありますか】

	全体	とても興味（関心）がある	どちらかといえば興味（関心）がある	何ともいえない	どちらかといえば興味（関心）がない	特に興味（関心）はない
	3,090	306	1109	868	481	326
	割合	9.9%	35.9%	28.1%	15.6%	10.6%
20才代	618	69	259	128	101	126
	割合	11.2%	41.9%	20.7%	16.3%	20.4%
30才代	617	75	231	179	74	58
	割合	12.2%	37.4%	29.0%	12.0%	9.4%
40才代	619	64	204	180	99	72
	割合	10.3%	33.0%	29.1%	16.0%	11.6%
50才代	618	45	192	197	110	74
	割合	7.3%	31.1%	31.9%	17.8%	12.0%
60才以上	618	53	223	184	97	61
	割合	8.6%	36.1%	29.8%	15.7%	9.9%

\* 割合は各年代において占める割合を示している。

■農家民宿、B & Bの認知度

農家民宿の認知度（「良く知っている」と「聞いたことがある」）は、全体で40%程度にとどまっており、三大都市の地域偏差も見られなかった。さらに各年代の内訳を見ると、20才代の7割近くが知らないとしており、最も認知度が高い60才代でも半数は知らないという結果になっている。

また、B & Bについての認知度（「良く知っている」と「聞いたことがある」）は、全体の約30%。年代別に見てみると農家民宿をわずかずつ低くした数字が出ているが、注目すべきは、「良く知っている」と答えたのが、農家民宿を「良く知っている」と答えた人（約4%）を大きく上回る10%もいたことである。B & Bを「良く知っている」と回答したのは、40代と50代が多かったが、20代から60代以上まで、偏りなく農家民宿を上回る数字を示した。認知度そのものの絶対値は高くないが、農家民宿に比べ、B & Bは「良く知っている」コアな理解層が多いということであろう。

【(本質問の前に農家民宿とB & Bについての解説を加えたうえで) あなたは各々の宿泊施設(形式)を知っていますか。】

		全 体	年 代 別				
			20才代	30才代	40才代	50才代	60才代以上
		3,090	618	617	619	618	618
「農家民宿」	良く知っている	124 4.0%	25 4.0%	20 3.2%	26 4.2%	24 3.9%	29 4.7%
	聞いたことがある	1,145 37.1%	183 29.6%	209 33.9%	222 35.9%	251 40.6%	280 45.3%
	知らない	1,821 58.9%	410 66.3%	388 62.9%	371 59.9%	343 55.5%	309 50.0%
「B & B」 (Bed & Breakfast)	良く知っている	337 10.9%	55 8.90%	59 9.56%	88 14.22%	76 12.30%	59 9.55%
	聞いたことがある	613 19.8%	102 16.5%	130 21.1%	135 21.8%	133 21.5%	113 18.3%
	知らない	2,140 69.3%	461 74.6%	428 69.4%	396 64.0%	409 66.2%	446 72.2%

\*割合は全体及び各年代において占める割合を示している。

上記2つの回答から明らかになったのは、農山村地域に関心を持っている若年層に対しては、B & Bを含めて、農家民宿という宿泊形式が全く浸透していないということである。体験型(修学旅行延長型)農家民宿の取り組みが始まってから日が浅いためかもしれないが、農山村側にとっては、若年層への情報発信力が弱いということを十分に認識しなければならない。

■宿泊施設を選ぶポイント

宿泊施設を選ぶ最大のポイントは、圧倒的に「宿泊料金」であった。次いで「食事内容」や「新しさ・清潔さ」が続く。

年代別に見た結果では、「宿泊料金」「食事内容」の1位、2位はどの年代でも変わらないが、「新しさ・清潔さ」という回答は、20代が最も高く、その後は低減の傾向を見せ、50代以降では「立地条件」に逆転されている。



【あなたが宿泊施設を選ぶポイントは何ですか。】

	回答数	割合
種類（ホテル・旅館、ペンション・民宿等の区分）	1,025	33.2%
新しさ・清潔さ	1,409	45.6%
立地条件	1,345	43.5%
付随設備（プール・温泉等）	583	18.9%
部屋の広さ	483	15.6%
食事内容	1,805	58.4%
宿泊料金	2,065	66.8%
その他	130	4.2%
特にない	210	6.8%
全体	3,090	100%

\* 同質問の回答について年代別にクロス集計したもの

		年 代 別				
		20才代	30才代	40才代	50才代	60才代以上
	3,090	618	617	619	618	618
種類（ホテル・旅館、ペンション・民宿等の区分）	1,025	234	197	188	182	224
	100	37.9%	31.9%	30.4%	29.4%	36.2%
新しさ・清潔さ	1,409	331	302	274	248	254
	100	53.6%	48.9%	44.3%	40.1%	41.1%
立地条件	1,345	286	275	243	262	279
	100	46.3%	44.6%	39.3%	42.4%	45.1%
付随設備（プール・温泉等）	583	105	118	140	111	109
	100	17.0%	19.1%	22.6%	18.0%	17.6%
部屋の広さ	483	109	114	97	88	75
	100	17.6%	18.5%	15.7%	14.2%	12.1%
食事内容	1,805	343	366	376	352	368
	100	55.5%	59.3%	60.7%	57.0%	59.5%
宿泊料金	2,065	443	433	416	396	377
	100	71.7%	70.2%	67.2%	64.1%	61.0%
その他	130	16	32	27	25	30
	100	2.6%	5.2%	4.4%	4.0%	4.9%
特にない	210	32	38	44	44	52
	100	5.2%	6.2%	7.1%	7.1%	8.4%

\* 割合は各年代において占める割合を示している。

## ■ 農家民宿、B&Bを利用してみたいか

そもそもの認知度があまり高くないため、参考程度に受け止めておくべきかもしれないが、農家民宿もB&Bも、内容・料金次第では十分に誘客を見込むことが可能であることがわかる。

【あなたは農家民宿、B & Bを利用してみたいと思いますか。】

	全体	ぜひ利用してみたい	内容・料金次第では利用してみたい	よくわからないので、何ともいえない	特に利用したいとは思わない
「農家民宿」	3,090	250	1,331	830	679
	100%	8.1%	43.1%	26.9%	22.0%
「B & B」 (Bed & Breakfast)	3,090	240	1,324	865	661
	100%	7.8%	42.8%	28.0%	21.4%

### ■利用しても良い料金はいくらか

料金に関して最多回答は、農家民宿（1泊2食付）では5,000円～7,000円、一方、B & B（1泊朝食付）では5,000円未満であった。なお、参考までに「じゃらん宿泊旅行調査2010」では、国内の個人旅行の1回の宿泊費（大人）の平均費用は15,300円となっている。

こうした結果から見ると、都市部の住民にとって農山村地域への旅行は、リゾート地や一般的な観光地への旅行とは全く違う認識がなされていることがわかる。農山村地域への旅行は「安い」ことが第一であり、一般的な旅館やホテルに支出する費用と同額程度を出そうという人は極めて少ない。ただし、農家民宿やB & Bに関する知識を持つ人が少ないため、一般的な意見とするには裏付けが弱く、本調査に限定して言えることかもしれない。

【いくらだったら農家民宿、B & Bを利用してみたいと思いますか】

	全体	5,000円未満	5,000円以上 ～ 7,000円未満	7,000円以上 ～ 9,000円未満	施設や料理が良ければ、9,000円以上でも良い
「農家民宿」 (1泊2食付)	3,090	1,101	1,361	349	279
	100%	35.6%	44.0%	11.3%	9.0%
「B & B」(Bed & Breakfast) (1泊朝食付)	3,090	1,870	925	161	134
	100%	60.5%	29.9%	5.2%	4.3%

### ■農山村地域に旅行する場合に期待すること（複数回答可）

旅行への期待の中で最も多かった回答は温泉（60.6%）で、特色ある食事（55.0%）、地域の観光地めぐり（47.3%）と続いている。これは2005年11月に内閣府が行った「都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査」でも同じ傾向を確認することができる。（「農山漁村地域に滞在中、何をしておきたいか。」という質問に対しての回答。1位「温泉」、2位「観光地めぐり」、3位「山歩き」、4位「その地方の名物料理を食べる」）

端的に言えば、都市部の住民の考える「旅行するのに最も望ましい農山村地域」とは、①温泉があり、②特色ある食事が食べられて、③近くに観光地があること、である。

## 【あなたが農山村地域に旅行する場合に期待するものは何ですか。】

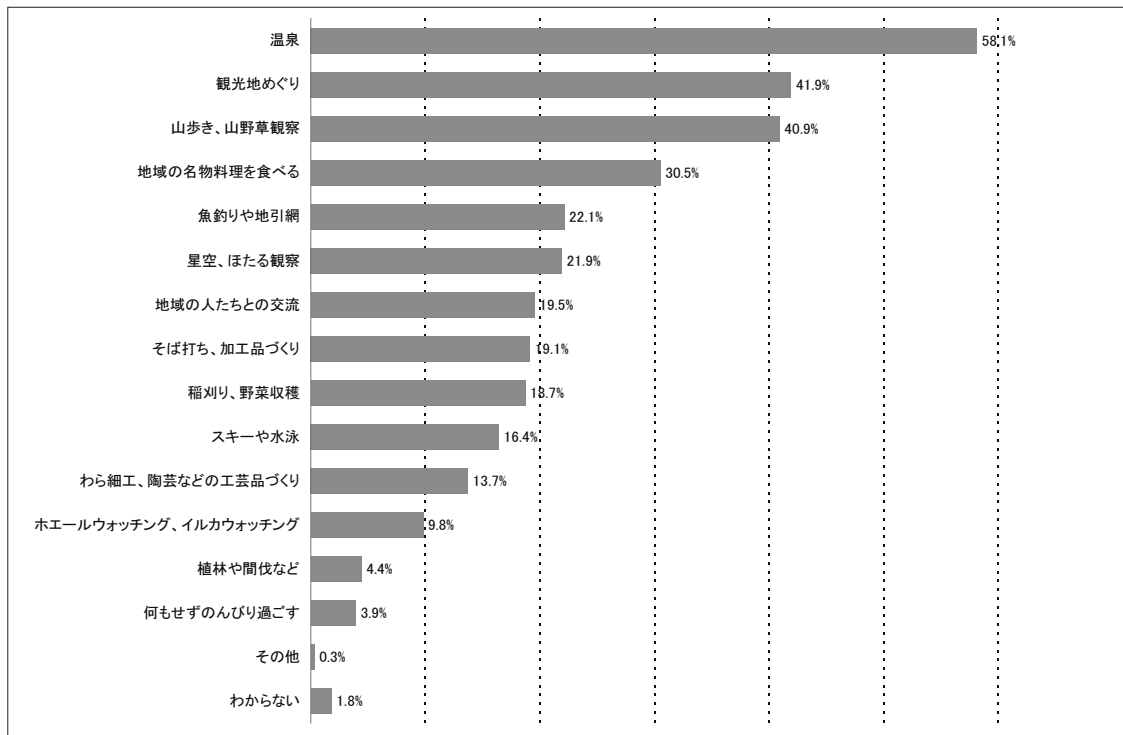
	全体	地域の観光地めぐり	特色ある食事	山歩き、散策	温泉	レクリエーション	魚釣りなどの体験	野菜収穫・そば打ちなどの体験	何もせずのんびりとした時間を過ごす	地域の人との交流	その他	特にない
	3,090	1,463	1,700	1,416	1,874	703	1,077	1,130	481	24	186	
		47.3%	55.0%	45.8%	60.6%	22.8%	34.9%	36.6%	15.6%	0.8%	6.0%	
旅行に行く際の同行者	なし（1人旅）	391	169	187	195	197	78	83	182	61	6	32
			43.2%	47.8%	49.9%	50.4%	19.9%	21.2%	46.5%	15.6%	1.5%	8.2%
	恋人、配偶者（2人での旅行）	1,081	518	626	507	698	212	374	394	178	7	42
			47.9%	57.9%	46.9%	64.6%	19.6%	34.6%	36.4%	16.5%	0.6%	3.9%
	小学生以下の子供を含んだ家族	475	232	276	204	303	192	255	137	66	5	18
			48.8%	58.1%	42.9%	63.8%	40.4%	53.7%	28.8%	13.9%	1.1%	3.8%
	中学生以上、20歳未満の子供を含んだ家族	216	109	116	94	134	57	82	83	31	0	8
			50.5%	53.7%	43.5%	62.0%	26.4%	38.0%	38.4%	14.4%	0.0%	3.7%
	その他の家族	283	143	164	124	171	47	90	110	42	2	15
			50.5%	58.0%	43.8%	60.4%	16.6%	31.8%	38.9%	14.8%	0.7%	5.3%
少人数の友人・知人	466	236	267	242	299	99	163	175	90	2	14	
		50.6%	57.3%	51.9%	64.2%	21.2%	35.0%	37.6%	19.3%	0.4%	3.0%	
団体旅行	30	14	15	13	17	10	8	11	8	0	3	
		46.7%	50.0%	43.3%	56.7%	33.3%	26.7%	36.7%	26.7%	0.0%	10.0%	
その他	14	4	8	7	9	2	6	7	2	0	1	
		28.6%	57.1%	50.0%	64.3%	14.3%	42.9%	50.0%	14.3%	0.0%	7.1%	
国内旅行には行かない	134	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

\*割合は各同行者の違いの階層において占める割合を示している。

修学旅行型を始め、農山村の生活体験ができることを売り物にしている農家民宿は数多いが、野菜収穫やそば打ちなどの体験を望んでいるのは全体の35%にすぎない。ただし、同行者別の分析をして、小学生以下の子供を含んだ家族だけに特化した場合には、こうした体験を望む声は、（小学生以下の子供を含んだ家族の）約54%にまで上昇する。

また、全体の36%の人は、何もせずのんびりと過ごしたい、と回答している。先にあげた2005年の内閣府の世論調査では、野菜収穫やそば打ちといった体験を期待しているのは各々約20%であったが、何もせずのんびりと過ごしたいと回答したのは、わずか3.9%であった。調査対象が異なるとはいえ、人々の農山村地域への旅行に期待するものが近年、大きく変化してきているのかもしれない。

これまでの農家民宿では、各種の体験を望んでいる35%をターゲットと考えて、様々な体験メニューづくりを中心にした準備を進めてきた。しかし、何もしないで過ごしたい人々も36%存在している。ここに体験型でない、余暇型農家民宿の可能性が見られる。



(2005年 都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査：「農山漁村地域に滞在中行いたい活動」)

### ■食事の形態について

夕食と朝食をともに宿泊施設で食べたいと考えている人は46%。男女比に差はないが、60才代以上が若干多い傾向を示している。しかし、逆に考えれば、夕食を宿泊施設で食べることにこだわっていない人が、50%以上もいることになる。やはり宿泊施設において朝食の準備は必要であるが、必ずしも1泊2食付にこだわる必要はなく、宿泊に関する別の条件を整備すれば、B & B導入の可能性も見出すことができる。

#### 【あなたが農山村地域に旅行する場合の食事の形態について】

夕食、朝食ともに宿泊施設で食べたい	1,423	46.1%
夕食は外食でも構わないが、朝食は宿泊施設で食べたい	913	29.5%
素泊まりでかまわない（自炊を含む）	268	8.7%
特にこだわりはない／この中にはない	486	15.7%
全 体	3,090	100%

### ■農山村地域での宿泊する場合の不安要素

男女を問わず、最も不安要素が高いのが「水回りの清潔さ」であり、第2位の「部屋の清潔さ」と併せて考えると、農山村地域の宿泊施設に関する都市部住民のイメージが浮かんでくる。

また、男女で極端な差が表れた回答が「虫の多さ」である。男性に比べ、女性は虫の多さを不安に考えている人が多く、特に20才代の女性にその傾向が強い。施設の清潔さの一要素となるかもしれないが、女性顧客を重視する場合には、特に留意すべき事項であるかもしれない。

## 【あなたが農山村地域に旅行する場合、不安な要素があればお答えください】

	部屋の 清潔さ	水回り (風呂・ トイレ) の清潔さ	食事の質	接客サー ビスの質	交通の 便の悪さ	料金水準	虫の多さ	すること がない	その他	特に 不安は ない
全 体	1,646	2,097	899	635	1,522	765	1,537	215	53	191
	53.3%	67.9%	29.1%	20.6%	49.3%	24.8%	49.7%	7.0%	1.7%	6.2%
20才代	348	428	177	159	349	142	365	59	5	27
30才代	338	418	165	137	295	150	317	41	15	37
40才代	350	412	181	140	278	165	304	47	13	44
50才代	312	398	180	110	286	156	276	34	15	37
60才以上	298	441	196	89	314	152	275	34	5	46
男 性	730	949	435	296	653	395	604	107	20	135
	47.2%	61.4%	28.2%	19.2%	42.3%	25.6%	39.1%	6.9%	1.3%	8.7%
20才代	144	180	76	61	165	73	141	26	2	22
30才代	143	191	83	74	130	84	124	22	8	28
40才代	167	188	94	67	120	84	122	21	4	28
50才代	145	186	92	54	115	79	111	18	5	24
60才以上	131	204	90	40	123	75	106	20	1	33
女 性	916	1,148	464	339	869	370	933	108	33	56
	59.3%	74.3%	30.0%	21.9%	56.2%	23.9%	60.4%	7.0%	2.1%	3.6%
20才代	204	248	101	98	184	69	224	33	3	5
30才代	195	227	82	63	165	66	193	19	7	9
40才代	183	224	87	73	158	81	182	26	9	16
50才代	167	212	88	56	171	77	165	16	10	13
60才以上	167	237	106	49	191	77	169	14	4	13

### 3 新たなかたちの農家民宿とその課題

アンケート調査によって、都市部の住民が農山村地域へ旅行（宿泊）する際に問題になると考えられる点が明らかになった。こうした点を検証しながら、小規模農家にも取り組める、手間のかからない新たなかたちの農家民宿について、その姿や課題等を探ってみる。

#### 3-1 新しいかたちの農家民宿の姿

##### (1) B&Bの導入と農家レストランの活用による「泊食分離」

農家の負担が少なくなるスタイルとして欧米のB&Bを紹介したが、アンケートで参考になるのは、まずは食事面についてであろう。

既述したとおり、一般的な1泊2食付の宿泊はすでに日本人の中に文化・風習に根付いたものになっており、アンケートからも食事を楽しみに旅行する人が多いことがわかる。しかし、夕食を宿泊場所で食べたいという人と、それ以外の人がほぼ同数であることから、農家民宿にB&Bを導入することは何ら問題ないであろう。

問題となるのは、宿泊客の夕食というニーズをどうやって満たすかにある。これを解決してこなかったことが、わが国でB&Bが浸透しなかった理由でもある。解決策としては、海外のように、宿泊場所以外で地域の特色ある食材を使った食事を提供できる施設が存在すれば良い。本論では具体的に「農家レスト

ラン」の活用を提唱したい。

農家レストランとは何か。農業センサスでは、「農業を営む者が食品衛生法に基づき、都道府県知事の許可を得て、不特定の者に、使用割合の多少にかかわらず自ら生産した農産物や地域の食材を用いた料理を提供し、代金を得ているもの」とあるが、一般的にはもう少し広く、「農家によって直接経営される、もしくは農家との緊密な連携の中で経営されるレストラン」という解釈がなされている。世界農林業センサス2010によれば、既に全国で1,248件の店舗があり、5年前に比べ、1.5倍以上の増加をしている。

	表4-1 農家レストランの数(経営体)		
	2010	2005	増減
富山県	9	16	-7
石川県	15	7	8
福井県	13	9	4
長野県	79	51	28
岐阜県	17	17	0
静岡県	24	24	0
愛知県	27	14	13
三重県	14	6	8
滋賀県	12	8	4
全 国	1,248	826	422

多くの農家レストランは、個人経営ではなく、農協などの団体経営や、各集落、農家グループなどが経営している。また、最近では農村地域の女性を中心となって農家レストランを起業するケースも多い。こうした農家レストランであれば、ステレオタイプではない、地域の特色ある食材を使った郷土色豊かな料理を提供することができる。

しかし、既存の農家レストランをB&Bの農家民宿と組み合わせるにはいくつかの問題点もある。多くの農家レストランでは、メインを昼食時間においており、営業時間も夕方までであるところが多い。これは農家レストランを実質的に運営している農村の女性たちが、比較的余裕のある昼時間を活用してレストランの運営をしており、夕方以降は自家に戻り、家事を行うためである。こうした背景のため、営業時間を単純に延長させることは困難かもしれない。しかし、例えば夕食を予約制として、できるだけ少人数での対応とするのであれば、現行のままでも十分に対応できるであろう。

また、一定の地域において、複数の農家民宿と農家レストランを連携させ、予約制と併せて、複合的に運用することも効果的である。そうすれば一定の客数を確保できるため、農家レストランの営業面でもプラスになる(図3-1)。

さらに、近隣に農家レストランのない地域の場合、例えば、一定規模の食堂を有する中規模程度の農家民宿があれば、その食堂を農家レストランのように見立てることも可能であるし(図3-2)、宿泊者は車での来訪が主であるため、食事が出来るという点では、レストランだけでも利用できるオーベルジュ(注)や道の駅、食堂のある日帰り温泉といった施設の活用も可能であろう。

いずれの場合も、「地域全体で取り組む」という意識が重要である。宿泊機能はB&Bの農家民宿、食事機能は別の施設が受け持つという共通認識を地域全体が持ち、それぞれが連携して運用されることにより、地域が一体となって宿泊客を受け入れる仕組みを構築することが、食事の問題の解決につながる。

図 3 - 1

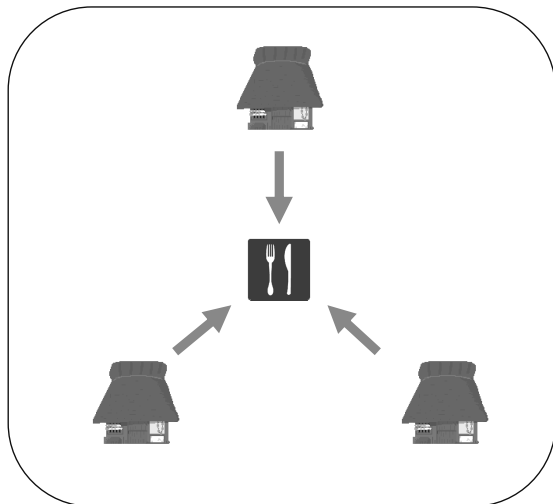
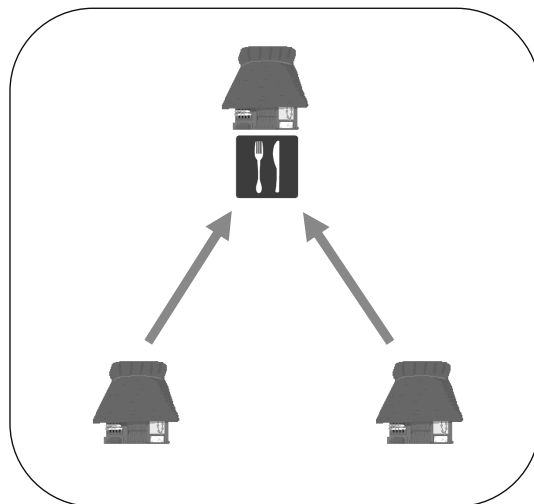


図 3 - 2



(注) オーベルジュ (仏Auberge)：フランスが発祥の、郊外や地方にある宿泊施設を備えたレストラン。日本ではフレンチの一般化とともに全国の観光地やリゾート地、別荘地などにもオープンするようになった。現在の日本におけるオーベルジュは、日本独自の旅文化とも融合し、日本料理や世界各地の料理を提供する多彩なスタイルのオーベルジュが登場している。(日本オーベルジュ協会HPより)

## (2) 余暇型の農家民宿

アンケートからわかるように、農作業等の体験に一定のニーズがある一方で、自由な時間を過ごしたいという回答にも同程度のニーズがある。また、都市部からの旅行者に農作業体験というサービスを提供できるのは、何も農家民宿だけではない。地域の観光協会やJAが窓口となつての仕組みがあれば足りるはずである。農家の手間を削減するという観点からは、体験型ではなく、宿泊客に自由でのんびりした時間を提供する、余暇型の農家民宿であることが望まれる。

## (3) 農家民宿の設備・仕様など

農家民宿として必須なのは、宿泊客の「水回りの清潔さ」「部屋の清潔さ」への不安解消である。アンケートからもその不安が如実に読みとれる。「農家民宿は清潔ではない」というイメージを一変させるほどの清潔な施設・設備であることが必要であり、それが宿泊施設としてのアピールポイントとなる。

しかし、清潔さを維持することは、手間や時間がかかることでもある。そこで、出来る限り農家の負担を少なくするために、「手入れのしやすさ」と「設備の標準化」という着眼点が必要となる。

魅力ある、特色ある施設にしようと凝った装飾品を使用するのではなく、手入れのしやすさを重視し、日々の清掃にかかる手間や時間を出来るだけ削減する。そして設備を標準化して、例えば同じ地域にある別の宿泊施設との共通品で設備を整えておけば、共同購入によるコストダウンや汚損による取り替えも容易に行うことが出来る。これらの着眼点によって農家の手間や時間の削減が可能になる。

また、可能であるならば、農家の生活の場と宿泊施設が明確に分離されていることが望ましい。宿泊客が農家との交流を期待している場合には、デメリットにもなりうるが、アンケートでは宿泊客が地域の人との交流を望む声は意外と少ない。農家にとってみれば、宿泊施設が生活の場から離れていれば、「場を提供する」だけとなり、宿泊客にとっても、のんびりと自由な時間を過ごすことが出来る。

建物の仕様は、清潔さが保たれるのであれば、外観、内装ともに日本の古民家風であっても良いである

う。ただし、外観については、豊かな農村風景・景観を損なわないように、その地域の現状を踏まえての配慮が必要である。

#### (4) 宿泊料金

アンケート調査では、宿泊客の望む料金帯が一般的な宿に比べて低い水準にあることがわかった。B & Bであるならば、1泊5,000円以下であることが望ましいが、貴重な現金収入になるとはいえ、この料金水準では1か月あたりの売り上げは極めて限定されたものになってしまう。農家民宿、B & Bに関する知識不足もあり、アンケートでは、「田舎にある小規模民宿」というイメージでの回答がなされた可能性も否定できないため、適切な料金水準についての調査はもう少し精査が必要であろう。

新しいかたちの農家民宿は、あくまで主業が農業であり、副業としての位置づけであるため、ホスピタリティーという点では専業のホテルや旅館に及ばないかもしれないが、宿泊施設としての快適さや美しい農村風景といった点での宿泊客の満足度が高ければ、5,000円以下という低料金でなくとも十分に誘客は可能である。

アンケート結果からは具体的に表せないが、その農山村地域に、都市部の住民が是非訪れたいという衝動を起こさせる特別な価値があれば、料金相場は定まったものではない。豊かな農環境から生み出される美しい風景・景観といった地域の持つ資源を十分に理解したうえで、どういった料金水準とするかを慎重に見極めることが必要である。

### 3-2 残された課題

#### (1) 初期投資 (イニシャル・コスト)

B & Bであれば確かに農家の手間は少なくなるが、それでも新たに開業する場合には、当然、一定の初期投資が必要となる。小規模農家にとって、自家を改築(離れを新築)する数百万円の費用は決して少ない負担ではない。そのため、初期投資に係る費用をいかに抑えるかが重要なポイントとなる。この点は、先に述べた「設備の標準化」の合理性にもつながる。

自治体によってはグリーン・ツーリズムに関連した制度として、個人の開業する農家民宿に補助金を出しているところもあるが、多くは数万円程度であり、旅館業法等の申請手続き費用の免除というかたちでの補助を行っているところも多く、実質的な経済支援として期待できる制度とはなっていない。

農山村地域において活用されている国、自治体の補助金は数多くあるが、基本的なスキームは、農家個人に多額の補助金が交付されるものではなく、事業主体が農協や農事組合法人といった団体、自治体や第三セクターのような組織であることが殆どである。今後は農家民宿を開業したいという小規模農家への一定金額の直接的補助が可能となる、弾力的な制度となることを期待したい。ただし、現行制度においても、小規模農家でも数人がまとまってNPOのような組織を作ったりすることで受給要件を満たすことが可能になるケースもあるため、補助金・助成金制度の活用も視野に入れて、事前に自治体等の関係機関に相談しておくことを忘れてはならない。

#### (2) 情報発信機能の強化

アンケートにもあるように、農家民宿は(B & Bかどうかを問わず)、圧倒的に情報発信力が不足している。現在はネット社会であり、個人が情報発信を行うことは容易に出来るものの、小規模農家が独自にかつ継続的に情報発信を行うことには一定の限界があろう。また、主業は農業であるため、副業たる事業のPRにどれだけ注力できるかという問題もある。さらにいわゆるクチコミというものも、農家民宿への



認知度が低い現状においてはあまり多くの効果は期待できない。こうした状況で期待できるものは、「地域の総合力」しかないであろう。

行政やまちづくり協議会、地域NPOなどの組織が、その地域の魅力的な宿泊施設として農家民宿の情報を発信し、特色ある食事のできる場所としての農家レストラン、さらには近隣の温泉地や観光地なども含めた地域全体の総合情報を発信していく努力が望まれる。もちろん、農家民宿自らの情報発信も必要ではあるが、それはあくまでもブログ等の必要最小限のもので十分であろう。

### (3) 専門家によるアドバイスと地域コーディネーター

農家民宿については、これまでも個人が自治体やJA等からのアドバイスを受けることはできたが、新たな農家民宿のスタイルやサービス、経営ノウハウ等については、これまでとは違った観点での取り組みとなるため、各々の専門家（プロ）からのアドバイスを求めることが望ましい。そのためには一定の費用を要することになるが、必要なコストであると割り切って、例えば各種の補助金を使ってでも、外部の意見を求めることが重要である。

また、新しいかたちの農家民宿では、地域での取り組みという観点が欠かせないため、農家民宿を営む小規模農家だけではなく、農家レストランなども含めた、地域全体を上手くコーディネートできる地域の専門家（地域コーディネーター）を育成していくことも重要となる。高齢化の進む農山村地域では、こうした人材育成が最も困難な課題であるかもしれないが、地域の活性化のためには、欠かせない要素となるため、何とかして確保していくことが望ましい。

## 4 新しいかたちの農家民宿と地域活性化

ここで、ひとつの事例紹介をするとともに、本論の提唱する新しいかたちの農家民宿の効果としての地域活性化について述べる。

### (1) 「泊食分離」についての事例

宮城県加美町にあるB&Bの農家民宿「おりぎの森」には、敷地内に隣接して「ふみえはらはん」という農家レストランが建てられている。その成立過程が非常に興味深い。

まず、地域の婦人層が寄り合って話し合いをして、地域で取れた食材を使った食事処を建てることになった。代表者は渋谷文枝さん。渋谷さんの自宅敷地内に農家レストランが建てられた。やがてこの農家レストランが評判となり、遠方からもお客さんが来るようになると、自然に「泊まるところがほしい」という声が出始めたようだ。そして渋谷さんの娘さん、渋谷わかなさんが同じ敷地内で始めたのが農家民宿の「おりぎの森」。ここでは宿泊できるのは1日1組のみ。評判の良かった農家レストランに隣接していることを活用して、B&Bを採用した。しかし夕食は、農家レストランで予約して食べることが出来る。

農家レストランは、もちろんランチタイムをメインに営業しているが、農家民宿に宿泊するお客さんの数が少数であるために、予約すれば夕食対応が可能であり、両者は非常に上手く連携をとっている。このように、農家民宿と農家レストランを1セットで考えて、連携させていくことが重要なポイントになる。「ふみえはらはん」と「おりぎの森」は、母娘が同一敷地内で協力して運営している（写真5-1、5-2、5-3）が、自動車での数分程度の移動距離であれば、十分に同じ機能を果たすことが可能であろう。

写真5-1 農家民宿「おりぎの森」



写真5-2 農家レストラン「ふみえはらはん」



写真5-3 右側建物が、農家民宿  
左側建物が、農家レストラン

農家民宿としてB & Bの導入が出来るかどうかは、食事機能を担える施設が近隣してあるかどうかにかかっている。そして、その食事機能を担う施設の成功が、ひいてはB & Bの農家民宿の成功にもつながる。もし、農家レストランやそれに準じた食事施設などが何もない地域であるならば、行政やJA等の運営・支援によって、まずは特色ある農家レストランなどを先行して整備する方が得策であろう。法人やNPOのような一定の組織が運営する農家レストランの整備については、「グリーン・ツーリズム促進等緊急対策事業」などの各種補助金を活用することも可能であるため、地域の総合力を活かした取り組みとしても実現しやすい。

そして、新たに農家レストランを設置するのであれば、その時は、集落の中心地付近に立地することで、地域の農家の協力を得やすい状況をつくることが望ましい。農家レストランの運営が安定した以降に、周辺の小規模農家に呼びかけて、手間のかからない「副業」として、B & Bの農家民宿をスタートさせる。こうした流れが、地域にとって最も望ましい手順になるのではないだろうか。

## (2) 農山村地域の活性化に向けて

これまでの農家民宿は、農山村地域に残された生活文化や自然環境を体験したいというニーズに着目し、都市部の住民を誘客することによって、直接的な経済効果、地域の活性化を図るという考え方にあった。しかし、新しいかたちの農家民宿では、主業である農業を継続してもらうことを第一義として考え、それによって維持・保全される、豊かな美しい農環境、農村風景を都市部の住民にとっての「魅力」として位置づけ、そこに誘客し、直接的な経済効果と同時に、地域としての取り組みの必然性を付随させること

で、農家民宿に関わる人々を巻き込み、地域全体を活性化させる、間接的な効果も期待出来る。

<従来の農家民宿との比較>

	従来の農家民宿	新しいかたちの農家民宿
滞在理由	農作業等の体験	農環境、農村風景のんびりとした時間を過ごす
主な客層	グループ、団体	個人
食事	1泊2食付	1泊朝食付
位置づけ	特に決まっていない	主業である「農業」の副業
農家の負担（時間・労力）	中～多	少
地域との連携	特に必要ではない	不可欠
地域の活性化	誘客による直接的効果	誘客による直接的効果 地域との連携による間接的効果

さらに、新しいかたちの農家民宿は、小規模農家にとって貴重な現金収入の手段となり、生活環境の向上という副次的効果も期待できる。また、展開の仕方によっては、農業だけでなく林業にも、そして農山村だけでなく、豊かな風景の残っている漁村にも活用することが可能であるだろう。

地域の活性化は、何をもちその実質と考えるのか、具体的な目標を持つことが大切になるため、例えば、「入込観光客を○%向上させる」という目標でも良いし、「住民満足度を向上させる」（地域の生活に満足している人を○%にする）というものでも構わないので、できるだけ関係者の共有できる、より具体的な目標を立てることが重要である。こういった目標が適切であるかは、その地域の置かれている状況によって異なることから、自治体などを含め、取り組みに携わる多くの人々が参画したうえで、その地域に合った具体的な目標を立てるべきである。

## 5 最後に

本論では、農家の本旨は農業を営むことであり、農業によって維持される、豊かで美しい農環境、農村風景を維持・保全したうえで、それを活用することが大切であり、農家民宿はその活用に役立つひとつの方策としてあること、そして小規模農家にも取り組むことが出来るよう、農家にとっての負担が少ない、新しいかたちの農家民宿のあり方を論じてきた。

農業を取り巻く状況は今後ますます厳しいものとなることが予想される。しかし、わが国の農山村地域にはまだまだ多くの秘められた魅力が残されており、農業を継続することは、こうした魅力を守っていくことにもつながるという認識を持つべきである。そして、農山村地域に対しては、過疎化・高齢化が進む困難な地域という消極的な視点だけでなく、美しい農環境、農村風景という秘められた魅力を有する豊かな地域であるという積極的な視点を併せて持つことが必要であろう。

以上